

## 龍谷大学図書館蔵『保元物語』近世初期写本

### 翻刻（一）

広島大学日本語史研究会

#### 一 はじめに

ここに翻刻を開始する龍谷大学図書館蔵『保元物語』（写字台 913.39 / 3W）は、龍谷大学大宮図書館貴重書庫に蔵される、近世初期写の上下二巻本である。書名は、内題による。龍谷大学図書館貴重資料画像データベースに、全文のカラー画像が公開されている。その画像に見られるとおり、奥書は存しない。

本書は、上巻冒頭が「近來帝王まし／＼き」で始まり、下巻末を「保元のかせん（合戦）はふしぎ（不思議）なりし事ぞかし 伯父をきる平氏もあり ちゝをころす源氏もあり あるいは子にをくれて身をなくる母もあり あるいは主にわかれていのちをすつる郎従もあり 一かたならぬあはれは此時なりとぞ申ける」で結ぶ。

この本文を持つ諸本を、永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系31』（一九六一年、岩波書店）の「解説」は、「第三類」に分類した（一二頁）。その第三類の初めに挙げられた京都大学附属図書館蔵本（5-06ホ6（普））三巻三冊は京都大学貴重資料デジタルアーカイブで、同類で根津本と呼ばれる筑波大学附属図書館蔵根津文庫旧蔵本（中央和装ル1-42-1）は筑波大学附属図書館ホームページで、全文の影印を閲覧可能である。また、同系本・早稲田大学図書館蔵本（へ

12 04581）三巻三冊も、早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」で画像公開されるとともに、早稲田大学蔵資料影印叢書第十七巻『軍記物語集』にも収載されている。

これらの第三類における龍谷大学蔵本の位置づけについては、原水民樹「管見『保元物語』の伝本二、三」（『徳島大学総合科学部創立記念論文集』（一九八七年三月）所収）を、その他の写本については、原水民樹『『保元物語』写本目録稿』（『言語文化研究』6、一九九九年二月）、「（同）補遺」（『言語文化研究』15、二〇〇七年十二月）（いずれも、『保元物語』系統・伝本考』（二〇一六年、和泉書院）所収）を御参照願いたい。

第三類・京都大学附属図書館蔵本は、早川厚一・弓削繁・原水民樹『京図本保元物語』（一九八二年、和泉書院）で、その全文が翻刻された。その校合に、第三類「京都大学国史研究室蔵本」「筑波大学蔵附属図書館蔵本（根津文庫旧蔵本）」が使用され、他諸本も参照されたものの、ここに翻刻する龍谷大学蔵本は、用いられなかった。

本書龍谷大学蔵本は、巻下の一行文字数が「京図本」よりも多く、全体墨付が十紙ばかり少ないため、上下二巻に収められている。本書の巻下巻頭は、「宇治入道大相國は新院の御方の軍やふられぬと聞

しかは」で始まる。これは、京図本・巻中の第35ウ五行目半ばに相当する（公開画像では、Image101of181の右から五行目である）。

この『保元物語』第三類の用語には、「俗語的表現」が見られるとの指摘がなされている（森井典男「保元物語」の形成と発展——「語りもの」の形成に関する一試論」——〈神戸大学文学部国語国文学会「国文論叢」8、一九六〇年五月〉）。

龍谷大学蔵本は、右の京図本同様、詳しい振り仮名が加點され、漢語の仮名書き例も多い。また、振り仮名や本文には、濁点を加點した例が豊富であり、他の第三類本よりも日本語史資料としての価値が高い。それにもかかわらず、全文の翻刻は未刊である。

そこで、広島大学日本語史研究会での輪読対象文献として選定し、毎週読み進めてきた。本稿では、巻上巻頭から第二十三丁までの翻刻を公表する。

翻刻のご許可を頂いた龍谷大学図書館に対し、心中より御礼申しあげる。  
(以上、佐々木 勇 記)

## 凡例

一、本翻刻は、龍谷大学図書館蔵『保元物語』（写字台913.39／3W）を、原本の行取りで、現行の字体に改めたものである。仮名遣いも、原本のままとした。

一、促音・舌内入声音に使用される



は、「ツ」で示した。

一、虫損等で欠損した文字を残画から推読した場合は、「」に入れた。

一、本翻刻は、石田芽衣・稲熊詩帆・藤本愛捺・鹿島大吾・黒木裕梨香・館林佑樹・藤井日羽・日野綾香・研裕太・元山美乃里・村上愛

結・宮崎翔太・森双葉・堀邊隆晴・後藤結衣・荒尾佳澄・楊曉敏・松本佳子・源さちあで作成した。

なお、翻刻データの入力は、鹿島大吾・館林佑樹・藤井日羽・研裕太・元山美乃里が行い、佐々木勇が確認・修正した。

## (一オ)

1 保元物語上  
2 近來帝王まし／＼き御名をは鳥羽の禪  
3 定法皇とそ申ける天照大神四十六世の  
4 御す多神武天皇より七十四代の御門也堀  
5 川天皇第一の王子御母贈皇太后宮閑院  
6 の大納言実基卿の御むすめなり康和五  
7 年正月十六日に御誕生同年八月十七日皇  
8 太子にたゝせ給ふ嘉承二年七月九日堀川天  
9 皇かくれさせ給ふ同十九日御子五歳にして位

## (二ウ)

1 につかせ給ふ踐祚御在位十六年の間海内し  
2 つかにして天下をだやか也風雨時にしたがひ寒  
3 暑おりをあやまたず御年廿一にして保安  
4 四年正月廿八日御位をしりぞかせ給て第一の御  
5 子崇徳天皇にゆつりたてまつらせ給ふ御  
6 配流の後は讃岐院とそ申ける大治四年七  
7 月七日白川院かくれさせ給ひしよりこのかた天  
8 下のことをしろしめす忠ある者をは賞じ給へ

9 りせいたいせいしゆの先規にもたかはすみあ  
(二才)

1 るをもなだめ給ふ大慈大悲の本誓に相かな  
2 へり國とみ民やすかりきされは恩光あ  
3 たゝかにてらして國土みなゆたか也とくおほく  
4 あまねくうるほして人民ことゝくのとな  
5 り其後保延五年五月十八日美福門院の御  
6 腹に近衛院御誕生あり同年八月十七日春  
7 宮にたゝせ給ふ永治元年十二月七日御とし  
8 三さいにして御即位あり其後先帝を是新  
9 院と申上皇をは一院とそ申ける是により

(二ウ)

1 て一院と新院たかひに御心よからす成給ふ同  
2 年七月十日上皇鳥羽殿にして御くしおろさ  
3 せ給ひけり御とし卅九御よはひいたおとろへ  
4 させ給はされ共宿善うちにもよほし善  
5 縁外にあらはれて真実報恩の道に入せ  
6 給ふ久壽二年八月に近衛院當顔いまた春  
7 のかすみにおとろへさせ給はされ共らんしつ  
8 たちまちに秋のきりにをかされ給ぬ御年  
9 を思へは十七歳思ひあへさりし御事也一院  
(三才)

1 女院の御なけき中ゝ申ををろかなり人間は是  
2 老少不定さだまれるならひととはかねて是を  
3 しろしめせとも禁中みなくれになり天下こ

4 とゝくばうぜんたり中印和漢の貴賤昔  
5 よりいまにいたるまで親にさきだつ子子にを  
6 くるゝおや其數多しといへとも此御なけき程の  
7 ためしはむかしも今も承及ばずそもゝ新  
8 院は治二天下一十九年の間一天雲はれめいほう  
9 のこゑさだかなりしかはいつれの時の誰人か

(三ウ)

1 此御くらひをはかたふけ奉るへきなれ共御弟近  
2 衛院の當腹の宮あひしの道をうけとらせた  
3 まひしかは是非なく御くらひをおしとらせ給  
4 てせめては廿のほうざんをもたもたせ給はずわつ  
5 かに十七年の春秋をおくりかねてか様にかくれさ  
6 せ給ひけるぞかなしき神武天皇は治二天下一七  
7 十六年御壽命一百廿余年也昔は國王の御壽  
8 命もかくこそひさせ給ひけるに末代こそ心う  
9 けれ仏も人も壽命の長短不同な「る」にやしや

(四才)

1 か如來よりはるかのかさき照日光如來は御命卅  
2 年住無住如來はわつかに一日一夜也月面如來  
3 はたゝ一日朝に出て夕に入給ひしかはわうじやくの  
4 日輪はやくかくれ生死の長夜いよゝふかかり  
5 きまことに本覺常住の仏祖分段の御命をは  
6 かうとそ御心にまかせ給はぬ御事なれいはんや我  
7 太子近衛院は人皇七十六代にあたり給へり御かと  
8 世はまつ世にのそみ位は如來にをとり給へは有

9 待の御身もちを持たもたから無常むじやうのあらしをはいかて  
(四ウ)

1 かのかれさせ給ふへきとおほしめしなくさまさり  
2 しそつみふかうはおほゆるさては新院しんいんおほしめ  
3 しけるは今度こんどの御位ぐらいには我御身われみこそかへしつ  
4 かせ給はす共一宮重仁親王いちのみやしげひとしんわうはよものかれさせた  
5 まはじと思おも食くまうけたりけるに不慮ふりょの外に  
6 後白川院ごしろかわのいんの四宮とてうちこめられてまし／＼  
7 けるか御位ぐらいにつかせ給ひけり是これにて新院しんいんし  
8 けひとの御いきとをりふかきしゆそにこそ當たん  
9 今かくれさせ給ぬれと美福門院びふくもんいんの御いきと

(五オ)

1 をりふかくして内ないと法皇ほうわうにも申させ給ひける  
2 とかやさればたかきもいやしきもまことの親子おやこ  
3 ならぬ御中程みちう心こころうき御事はましまさす久壽きうじゆ  
4 二年ふゆの冬の比法皇ほうわうくまのへ御参詣みさんけい有ける證誠せうじやう  
5 殿でんの御まへに通夜つや有て現當げんたう二世の御祈精みせいあり所しよと  
6 さんけいのきせんへいはくをさゝげたな心をあわせ  
7 庭上ていじやうにみちみてり御まへの河波かわなみあらしにたくひて  
8 山をひゝかし夜深更よしんかうに及およでいと御心みこころすみわたり  
9 こしかた行いすゑを御觀法ぐわんぽう有けるにねの時ときは

(五ウ)

1 かりに及てうつゝともなく御夢想みむさう共なきに證誠せうじやう  
2 殿でんの御ほうでんの御簾みすのすよりひたりとおほ  
3 えてうつくしき御手みてをさし出させ給ひてうち

4 返／＼二三度どせさせ給ふ御事あり法皇ほうわうは御夢みむ  
5 想さうさめさせ給ひて人にはかうとおほせられずして  
6 ふしぎの事と思召おもて先達せんたちをめして御心みこころにかけ思召  
7 事ありきつとらなひ申させはやと仰ければ山上さんじやう  
8 に本もとは美作國みまさかのくにの者ものなりけるか八十ゆうよなるいほり  
9 のいたとてゆゝしきかんなぎありかれをめされて御  
(六オ)

1 ふしんの事ありうらなひ申せと仰ければかん  
2 なぎあしたよりして權現ごんげんをおろし奉るに日中ひる  
3 すくるまておりさせ給はす法皇ほうわうをはしめ奉て  
4 供奉くぶの人といかなるへき御事やらんとて目をす  
5 まし心をしつめておほしけるひつじのかたふく  
6 程ほどに成て權現ごんげんおりさせ給ふとおほしくてかななき  
7 法皇ほうわうにむかひまいらせて左ひだりの手をさしあけて  
8 うち返し是はいかに／＼とそ申ける法皇ほうわうは御覽みらん  
9 せられつる御夢想みむさうに少すこもたがはぬ間真実しんじつの

(六ウ)

1 御たくせんなりとおほしめされて御座ござをすへらせ  
2 給て御かうべを地につけたな心を合あて申ところ  
3 のふしんはこゝ候さていかに候へきやらんと申させ給  
4 へはかななきまことに心ほそきやうなるけしきにて  
5 さうのまなこより涙をなかつて  
6 手にむすふ水にうつれる月かけの  
7 あるかなきかの世にもすむかな  
8 此哥うたを二三度詠よじて申けるは君きみはしろしめされ

9 すやみやうねんの秋の比は崩御ならせ給ひて其  
(七才)

1 後世中手のうらをかへすかことくなるへしと御た  
2 くせん有ければ法皇をはしめ奉てぐぶの人と色  
3 をうしなひてあなあさましやははいかなる事  
4 そやさていかゝして御壽命延させ給ふへきやらんと  
5 申させ給へはかななぎ又申けるは君は我くにあるし  
6 にてまします五十余年をたもたせ給ふ我又此  
7 くにの鎮守なり一千余年になるされは利生  
8 方便心中にあはれまさはなければ共一業所  
9 感の衆生宿執かきり有事には護法の天童

(七ウ)

1 も守護の明神もちから及ぬ事也をよそくら  
2 く不退の地をこそねかひてもねかひますべき  
3 にかゝる濁世乱漫の世中に御心をとめてなに  
4 かはせん今はたゝひとへに後生菩提の御いと  
5 有へきなりとて權現あからせ給ひけり神は明  
6 年秋の比とこそしめし給へ共君は只今きへ入やうに  
7 そ思召月卿雲客は今又わかれたてまつるやうにそ  
8 おもはれける上道にはぐぶの人と王子のなれこ  
9 舞つねならぬ旅のよそほいをつかさとりいさみ

(八才)

1 あひてこそ参り給ひしに此御時の御下向には  
2 うちしめりたるけしきにて淨衣のそてをし  
3 ほりつゝ還御はすでになりにつけり同年の春の

4 ころより主上御不豫の御事まし／＼ければない  
5 けに付て様との御いのり有けれ共すこしも其  
6 しるしもわたらせ給はす春も過夏もくれぬ秋の  
7 なかはに及てはいとゝ所せきさま見えさせ給へは何事  
8 の御さたにもおよはす八月十五日は駒引とて東國よ  
9 り馬をげんず官使あふさかの関にゆきむかひ

(八ウ)

1 て是をうけ取礼儀ありし事なれとも御悩に  
2 よてこれをとゝむ放生會ばかりは恒例の事なれ  
3 はとてかたのことくとりおこなはれけれ共南殿の  
4 みすもあけられずよろつ物さひしき躰ありこ  
5 よひしも御こゝちみだりがはしく思召けるがみす  
6 二三間はかりあけられ雲井の月を多いらんあり  
7 をりしも十五夜の月くまもなかりけるに

8 秦旬一千餘里 凜々兮凍鋪

9 漢家三十六宮 澄々兮粉飾

(九才)

1 ゆへある夜半のけしき御らんじすてかたければ  
2 わさとははあらず折ふしまいりあつまりたまへる  
3 月卿雲客の中堪能の人をめされて御ゆうあ  
4 りけり文詞は詩を献じ哥人は哥を奏すいつ  
5 れも祝言ならすといふ事なし其中に御製一  
6 首そへられたりあはれにかたしけなくそおほ  
7 えし

8 むしのねのよはるのみかはをく露を

9 をしむわか身ぞまづきえぬべき

(九ウ)

1 法皇ほうわうは此御製このみよせいを御覽ごらんしてかつうはかんじかつう  
2 はいまはしくぞ思召おもひめがけるさる程ほどに 同 廿六日のいぬ  
3 の刻ときにはつめにかくれさせ給ひぬ今の近衛院こんゑのいんと  
4 申は是也御とし十七歳さいをしかるへき御事ごじぞかし  
5 法皇はさしもいとをしくなしき御事におもひ  
6 まいらせ給ひしかは朝夕あさゆふは千秋萬歳せんしうばんざいとこそい  
7 のり申させ給ひにさこそあへなくおほしめしけれ  
8 まことに有待うたいの御身ごみは高下かうげことなる事なし無  
9 常じやうのさかひには利利修陀せつりしゆだもきはす妙覺めうかくの如來にようらい

(十オ)

1 因果いんぐわのことはりをしめし大智ちの舍利弗しやりふも宿世しゆくの  
2 業ごうをかんず世間けんの無常じやう今に事なれども時に  
3 とてはあさましかりし御事也法皇は雲の上の  
4 うつり行ありさまを御覽するにも權現ごんげんの  
5 御たくせん有し御事おほしめして供御ぐごをもはか  
6 しくもまいらずつねはよるのおとゝへのみいらせ  
7 まし／＼けりかくて今年ことしは暮ぬつきの年改元かいげん  
8 有て保元ほうげんぐわんねんと年と申し春の比ひより又法皇御ご  
9 なうましますと聞えければ去年さるねん近衛院こんゑのいんかくれ

(十ウ)

1 させ給ひし御なけきのゆへにやとそ申けるひとかた  
2 ならぬ御なけきなりしかは六月十一日美福門院びふくもんいんは  
3 鳥羽とばの淨菩提院じやうぼだいいんの御所にて御ぐしおろさせ給ひけ

4 り御戒師ごかいしにはみたけの觀空上人くわんくうしやうにんぞまいられる法

5 皇は目にしたかつたのみなき様に見えさせ給へ  
6 は大法秘法ほうひみつぽうのこる所なくおこなはれ術道じゆどうそ  
7 こをきはめてつとめしかともしるしもわたらせ  
8 給はすいかなるへき御事やらんとて天下のさは  
9 きなりさるほとに七月二日つゐに崩御ほうぎよならせ給ひ

(十一オ)

1 ぬ御とし五十四いまた六十にだにもみたさせ  
2 給はねは是も又をしかるへき御事也一天てんくらやみ  
3 となり日月をうしなふがごとし万人ばんにんのなけき父  
4 母ものにもあへるにことならず釈迦しやか如來にようらいしやうし  
5 やひつめつことはりをしめさんとて二月十五  
6 夜半やはんに沙羅双樹さらさうじゆの下にしてかりに滅度めつどをと  
7 なへ給ひしに人天大會にんてんたい五十二類ごふににるい非情草木ひじやうさくもくにゐ  
8 たるまでみなうれへの色をあらはし此秋のはし  
9 めの二日崩御ほうぎよには月卿雲客げつけいうんかくかふりのこしを

(十一ウ)

1 地につけて直衣なをしのそてをぞしほり給ふちか  
2 くめしつかひし人とも今はいかなる世にかにうわの  
3 御みこゑをも 承うけたまはるへしやとて天にあふき地にうつぶ  
4 してぞかなしみ給ふまして女院にょいんの御なけきなか  
5 しく申もをろかなりゆかのうへにはむなしき御ふ  
6 すまのみのこれり御まぐらの下にはいにしへをこふ  
7 る御なみたもせきあへす南庭なんていに花を御覽すれ  
8 ともそてをつらねしにほひもなく北苑ほくゑんにむしを



9 きこしめせとも枕をならへし人ともなくされは夜  
(十二才)

1 もなかく日もなかくおほしめしける御心のうちこそか  
2 なしけれ去 年近衛院の御かくれこそ天下の御な  
3 けきなりしに又此御事うちそへていとせんか  
4 たなくそおほしめす一年御熊野まうての  
5 ときかななきかうらなひ申ける事も少もたが  
6 はす其後世中手のうらを返すがごとくなるへし  
7 と権現御たくせん有ければのちもいかなる世に  
8 かならんと申あひける程に禁中にも物さはかし  
9 く仙洞にもさゝやきつゝやゝ事あつて新院

(十二ウ)

1 の御かたのつはものともよるは東三条にあつ  
2 まりむほんの事を談じひるは山の上にのほ  
3 り木のすゑにあかりて内裏高松殿の案内  
4 をうかゝひ見るなとゝきこへければ三日下 野守  
5 義朝に仰て東三条の留主少監物藤原光  
6 定以下武士 兩三人めしとられぬ昨日二日法皇  
7 崩御ならせ給ひぬ今日三日かゝる事の出来ぬ  
8 れは後もさこそあらんすらめなと申あひけ  
9 る程に東西南北より武士共みやこへ入あつまり

(十三才)

1 兵具を馬におほせ車につんて入なと聞えけり  
2 そもゝ事のらんしやうを尋ぬれば新院  
3 と申は故法皇の第一の御子なれば御ゆつり

4 をうけさせ給ひぬ 去 保延五年五月十八日美福門  
5 院の御はらに近衛院御たんじやうある故院よろ  
6 こひおほしめされて同年八月十七日春宮にたゝ  
7 せ給ふ永治元年十二月七日三歳にして御即位あ  
8 り新院べちの御つゝかもわたらせ給はね共法皇  
9 の御はからひなれば新院もちからおよひ給

(十三ウ)

1 はすしかるに近衛院崩御なりぬる上は我御身  
2 こそかへしつかせ給はす共一宮重仁親王はよものか  
3 れさせ給はしと思召まうけられたりけるに後  
4 白河院の四宮とてうちこめられてわたらせ給ひ  
5 けるを御くらいにつけ奉らせ給ひけり此四宮と  
6 申は待賢門院の御はらにてわたらせ給へは新  
7 院とは一腹一性の御兄弟也されは美福門院の御  
8 ためにはいつれも御まゝ子にてわたらせ給へとも  
9 近衛院のかくれさせ給ひぬるはひとへに新院の  
(十四才)

1 しゆそしたてまつらせ給ふゆへにこそと女院  
2 の御うらみふかくして内と法皇にもとり申させ  
3 給ひしかは新院の御うらみふかゝりしかとも法皇  
4 御存生のあひたなればちからをよはせ給はす  
5 しかるにいま近衛院の世をはやくさられぬれ  
6 はうけさるゆへなり此時にあたりに重仁  
7 親王は嫡と正統たりもつとも其人たるをさし  
8 をきて員外なる四宮にくらいをうははれて

9 めんほくをうしなふ事こそやすからねとそ

(十四ウ)

1 おほしめされける君と／＼の御事かくのことし  
2 臣と／＼の御中又不快也其故は當閑 白忠通  
3 公と申は宇治禪定殿下の御嫡子又宇治大  
4 臣頼長と申は禪定殿下の二男 閑白殿の御  
5 弟御兄 弟のうへ父子の契約まし／＼ければ  
6 礼儀ふか／＼りけるかたちまち御中あしくならせ  
7 給ふ其ゆへは宇治左大臣殿と申は禪定殿下の  
8 御あいしにてまし／＼ければ禪定殿下の御は  
9 からひととして 去 久安六年九月廿六日兄 閑白殿

(十五オ)

1 をさしをきて宇治の長者に補せらる翌年  
2 仁平元年正月十日万機内覧の宣旨をかう  
3 ふらせ給ひて天下の大事をきこしめすゆへ也  
4 およそ攝政 閑 白の外に執柄の人あひならぶ  
5 事希代の例也とそ申けるされは閑白殿は  
6 攝祿の名はかりにて天下の事をはしるしめ  
7 されすこゝに閑白殿いきとをり申させ給ひ  
8 けるは先祖忠仁公よりこのかた内覧の長者  
9 を攝政攝祿につけらるゝは旧例なりしか  
(十五ウ)  
1 るを忠通執權の時にあたりて兩 職を左符  
2 にうばゝれてめんほくをこしなふのみならず  
3 してそしりを後代にのこすしかればすなはち左

4 符「マ」の執權によりてしんくわをかへさるへくんは忠通

5 がしへうをとめられて閑白を左符「マ」につけらるゝ  
6 かしからすんは内覧代の長者を閑白に付らるゝ  
7 か此兩 様天裁にありとしきりにいきとをり申  
8 させ給へは主上まことに此事ことほりなりと  
9 思召けれ共禪定殿下の御はからひなればちから  
(十六オ)

1 をよはせ給はすおよそ此左大臣殿も天下の事  
2 をしろしめさんにふそくなる人にてはまします  
3 和漢の礼義をとゝのへ自他の記録にくらからず  
4 諸道の淺深をさくり万機の輔として親疎な  
5 く朝家の重寶攝祿の臣たる御事よとそ聞  
6 えるけるされは閑白殿下の 詩 哥に長じ御手跡  
7 のうつくしくまし／＼けるをも左大臣殿はそね  
8 みてけり詩哥これ閑中のあそひ物かならず朝  
9 儀のよいにあらす手跡は又一旦の興也賢人  
(十六ウ)

1 是をたしなますとて我身はむねと五經を  
2 まなび仁義礼智信をたゝしくし給ふ節會除  
3 目官奏かやうの時もたま／＼御ことはあやま  
4 りもある時はいかりき怠状をあそはして職  
5 事弁官に是をたふあやしのとねりうしかひ  
6 にいたるまで御勘氣をかうふる時つみなきよ  
7 しをちんし申せは細くは是をきこしめしてまこ  
8 とつみなければ御こうくわいありけりおよそ理非



9 めいさツにして諸事きりとをしにまし／＼ければ  
(十七才)

1 悪左大臣殿とそ申ける御奉公も格別也関白殿  
2 は大内に御祗候有左大臣殿は引ちかへて仙洞に  
3 御参ありけり左大臣殿思召けるは内裏へまいり  
4 たりとても関白殿さておはしませは関白殿をもさ  
5 しをきて攝政攝祿せん事不定也此時新院  
6 の御代になしまいらせて関白殿をおしこめ奉り  
7 て世を我まゝにとりおこなはんとそ思召ける新  
8 院又思召けるは我十善のよくんつきざるによて  
9 万乗のくらいにいたるしかるに一たんのてうあひ

(十七ウ)

1 によて累代の正統をさしをかれて父子共にう  
2 れへをふくむされとも法皇御存日のあひた  
3 なれはちからおよはす一兩年の春秋をくくる今  
4 更斉明稱徳二代のあとをおひふたゝひ帝にそ  
5 なはるかしからすはくらしいを重仁にゆつり奉て政務  
6 にのそむか此時世をうばはんにあに天命にもそ  
7 むきしんはうにもそむかんや此条いかんと仰ら  
8 れければ左大臣とのまことおほしめしたつとこ  
9 るもつとも御りうんたるへく候天のあたふるをう  
(十八才)

1 けとらざるはかへツて其とがありと申候故  
2 院の崩御なりぬるをもつて時いたれる事  
3 をする此時思召たち候はてはいつをかごしまし

4 候へきもつともめてたき御はからひなり  
5 とそ申されける君と臣との御中かゝりしかは

6 源平兩家のつはもの共あるひは親のめいをそむき  
7 或は兄弟のよしみをわすれて思ひ／＼心に引わか  
8 る日本國大略二に引わかぬ内裏の事をこない  
9 は関白殿仙洞の事おこなひは左大臣殿内裏

(十八ウ)

1 の大將軍は下野守義朝安藝守清盛仙洞の大  
2 將軍は六条判官為義よしとものがち／＼也へいまのす  
3 けたゝまさはきよもりかおぢ也上といひ下と云源  
4 平兩家いづれも勝劣あるへしとおほえすい  
5 くさのならひ一方はまけ一方はかつせうぶかね  
6 てしりがたしたゝ御くわほうのせうれツにより  
7 御うんめいのよはきつよきによるへしとそ申け  
8 る新院の當時の御所は鳥羽の田中殿也故院此  
9 御所にて崩御なりしかは今御ちういん也新院

(十九才)

1 京へ御出あるへしと聞えければ何と聞わけたる  
2 事はなかりしかともきせん上下あはてさはき  
3 資財雑具を東西南北へはこひかへし上下安  
4 堵のおもひもなかりけり法皇崩御ならせ給はす  
5 はたゝいまかゝる事有へしやとたかきもいやしきも  
6 なけきあふ同五日少納言入道しんせいせんしを  
7 承て權非違使共をめしてせき／＼へわかちつか  
8 はす宇治路へはあきのはんくわんむねもりよと

9 ちへはすわうのはんくわんすゑさねあわたくちへは  
(十九ウ)

1 おきのはんくわん惟俊くらまちへはへいはんくわ  
2 む実友大江山へは新遠江はんくわん助俊をの  
3 洞へまいらんするものをめしとるへきよし仰ふ  
4 くめらる今夕関白殿大宮大納言伊通卿さんだい  
5 して議定あり東宮大夫宗能内裏よりめ  
6 されけれ共鳥羽殿へ参てさんせす六日あき  
7 のはんくわん宗盛宇治はし守護のために三  
8 百余騎にて大和大路南へむけてあゆませゆ  
9 (二十才)

1 ぐ程に法性寺の一橋の程にて誰とはしらす世  
2 騎はかりある勢のあつきよげなるかひたかぶと  
3 にてつと行あひたりあきのはんくわんいつこんそ  
4 めのきぬに白をのかりきぬにくろいとおとしのよ  
5 ろひにくろき馬にくろくらをいてのつたりけり  
6 弓とりなをし三百余騎がおもてにあゆませ出  
7 て此程みやこにむほんの聞え候によつて方とよ  
8 りつはものとも入あつまり候よし聞え候間みち  
9 へ權非違使等をつかはされ候也是は宇治  
(二十ウ)

1 はし守護のためにまかりむかひ候かう申は桓武  
2 天皇より十三代の後胤刑部卿忠盛か孫あきの  
3 かみきよもりか二男あきのはんくわんむねもりと

4 なのるたゝ今のほる勢の中に大將軍とおほしきか  
5 かちんやらんめゆいやらん色めは見えすぐろぼうた  
6 るひたゝれに小さくらを黄に返たるよろひにくろ  
7 つはの矢の廿四さしたるかしらたかにおひなしぬり  
8 こめ藤の弓のにきりふとなるにきかはらける馬  
9 のふとくたくましきに白ふくりんのくらをいて  
(二十一才)

1 そのりたりける世よきかまつさきにあゆませい  
2 てゝゆみとりなをして御なはたしかにうけ給候ぬ  
3 是は清和天王より十代のこういん攝津守頼光  
4 か弟やまとのかみ頼親が三代の孫中務丞頼治が  
5 孫下野守親弘がちやくしうのゝ七郎親治と名  
6 のるあきのはんくわん宗盛それは宣旨によつて  
7 上落か院宣によつて御上落か其段承候はんといふ  
8 ちかはるいかゝ思けん矢たはね引ときをしくつ  
9 ろけてしはらく物をあんしたるけしきにて  
(二十一ウ)

1 ひかへたるかとやいはまじかうやいはましとあんし  
2 けるか内裏へ参候といひてこゝをやのかれて子細  
3 なくとをり又本の儀なれは仙洞へ参といひて  
4 こゝをや思ひきるいかゝいはましとあんしけるか弓  
5 矢とるならひかりにもいつわりたる事は後代  
6 のはちなる物とて是は去比より左大臣殿  
7 御承にて仙洞へまいり候あきのはんくわんかたきと  
8 きゝなしてはへいれい引入てかぶとをき緒をし

9 め弓とりなをしつゐ立<sup>たちあかツ</sup>上てさてはえこそとをし

(二十二才)

1 申しけれどたいは王土<sup>わうど</sup>にすみながら朝敵<sup>てうてき</sup>と  
2 はなるましき物にて候そおりみの院宣<sup>いんせん</sup>にした  
3 かツてせんとうへまいられ候はんよりはことなきさま  
4 にてすみやかにだいいりへまいられ候へし宇野<sup>うの</sup>  
5 七郎是こそはんくわんのことはとおほえぬ  
6 左大臣殿の御うけたまはりにて仙洞<sup>せんどう</sup>へまいら  
7 むするものか御へんの口入<sup>くちいれ</sup>にて内裏<sup>だいり</sup>へ参てし  
8 うふたりはもつましきものを弓やとるものゝ一度<sup>いちど</sup>  
9 申つる事をへんするやうやあるやまとのくに

(二十二ウ)

1 おくのごほりに居住<sup>きよぞう</sup>していまた武勇<sup>ぶゆう</sup>の名を  
2 おとさす今はかうそや思ひきれてと廿余騎<sup>よき</sup>くつ  
3 はみをならへて三百よきか中へをめていてかけ  
4 入とをらんとをさじからめうからめられじと  
5 する程に一時はかりぞたゝかふたる三十余騎<sup>よき</sup>を  
6 三百余騎<sup>よき</sup>か中にをツとりこめたれはいつく  
7 にかたきか有ともおほえす宇のゝ七郎は馬は  
8 はづみかゝりたりひまもあらはかけやぶてと  
9 をりぬとそ見えしさる程に法性寺<sup>ほっしょうじ</sup>の一橋<sup>はし</sup>に違<sup>い</sup>

(二十三才)

1 勅<sup>ちやく</sup>のものありときこえければ内裏<sup>だいり</sup>へ参あつまる我  
2 も／＼とはせあツまりあきのはんくわん宗盛<sup>むねもり</sup>か  
3 勢<sup>せい</sup>一千余騎<sup>せんよき</sup>にそ成にけるあきのはんくわんはたか

4 き所にうちあかつてゆんつえつきつゐ立<sup>たち</sup>あかり  
5 てわうじもろき事なし一人もあますみなからめ  
6 とれやとぞ下知<sup>げち</sup>しけるうのゝ七郎<sup>ちゅう</sup>はもとより無<sup>ぶ</sup>  
7 勢<sup>せい</sup>なりけるかあるひはうたれあるひはをちゆき  
8 ければわづかに十余騎<sup>よき</sup>にそなりにけるをし  
9 ならへてくんでをつれば一騎<sup>き</sup>かうへに五騎<sup>き</sup>十

(二十三ウ)

1 騎をちかさなりければうのゝ七郎心はかうな  
2 れどもちからおよはす無勢<sup>ぶせい</sup>なれはいけとられ  
3 てげり其日の暮ほとにいけとりぐして返り  
4 まいるけしきあたりをはらてぞ見えし少<sup>せう</sup>と  
5 めしとられてきんごくせらる頭中<sup>とうちゅう</sup>将公通<sup>しょうこうと</sup>に仰<sup>おほせ</sup>て  
6 宗盛正下<sup>むねもりしょうげ</sup>の五位<sup>い</sup>にふせらるきゝ書<sup>かき</sup>のちうには  
7 うのゝ七郎親治<sup>おしかはる</sup>ついたうの勸賞<sup>くわんしょう</sup>によつてとそ  
8 のせられたる時にとてめんぼくとぞ見えし新<sup>しん</sup>  
9 院<sup>いん</sup>は此事きこしめしていとゝやすからずぞ思召<sup>しめしめ</sup>  
(二十四才)

1 ける(以下、つづく。)

(広島大学日本語史研究会)